

牛から学んだお金の大切さ

新潟県・上越教育大学附属中学校 1年 有波 詩織

私が今、お金が大切だと思えるようになったきっかけは、小学5年生のときに総合教科活動で牛を育てたことだ。

クラスのみんなで話し合い、牛を飼うことになったが、教頭先生に反対された。そのときは牛のことをなにも知らなかったのだ。反対された理由もみんながわかっていた。牛への興味、生き物を飼うという意識が足りなかったのだ。それから、必死に牛のことを調べて調べてやっと教頭先生から許可がでた。15万円を借金してホルスタインの子牛のオスとメス合計2頭を買った。私は小学5年生で生産者のひとりとして働くことになった。

牛の世話は、平日の当番はもちろん休日も祝日も当番があった。当番は牛小屋のそうじ、子牛のミルクやり、エサやりなど仕事内容も多くとても大変だった。しかし、仕事が終わると、達成感とやりがいを感じた。

牛を飼ってみて私達は、生産者としてのかべに何度もぶつかった。そのかべの中でも「除角」と「去勢」はとても心に残っている。除角とは、牛の角を除去することだ。去勢とは、オスの精巣を除去することだ。除角をすれば角でけがをする危険もないし、去勢をすれば性格が温厚になり、肉がやわらかくなるからどちらともした方がいい。何度も話し合っただけで済むことになったが、実際にその様子を見た私は涙がとまらなかった。

12月、オスの牛を出荷した。初めてのセリでは「大切に一生懸命育てた牛」とPRした。結果、6万円で売れた。5万円で買ったので利益は1万円。しかし、エサ代でそれ以上使っているのだから、利益はほとんどなかった。でも、うまれて初めて自分の力でお金を稼げてとてもうれしかった。最後に別れを言おうと思い、牛に近づいた。涙があふれた。でも、自分に牛はペットではない、家畜なのだ、と言い聞かせ涙をふいた。

3月が来て、メスの牛も出荷となった。みんなは借金という言葉の頭にいれ、真剣な目でセリを見た。値段はどんどん上がって27万9,000円でとまった。10万円で買ったので利益は17万9,000円もあった。エサ代と借金を引いて、クラス30人でわるとひとりが420円になった。担任の先生からの

「このお金はみなさんが生産者として立派にかせいだお金です。どうか大切に使って

ください。」

というメッセージと一緒に420円をもらった。受けとったときはとてもうれしかった。私にとってそのお金はお年玉でもらうお金よりも大きなものだった。それは、自分で汗と涙を流しながらがんばって働いて得たはじめてのお金だったからだ。

先生からのメッセージの「大切に使う」とはどういうことなのか、考えた。最初はそのお金で写真立てを買い、そこに私と牛との3ショットの写真を入れようと思った。でも、それが本当に「大切な使い方」なのかわからなくなり、使うのをやめた。使うのをやめてから数日後、先生から牛がセリ落とされた畜産家は、魚沼市にあり、中越地震で被害にあっていることを聞いた。それを聞いて、牛は人間のために生きている、私もそんな牛たちを見習いたいと思った。そういう思いと、このお金で誰かの役に立ちたいとの思いが合わさって魚沼市に義援金として送ることを決めた。

送ってから数日後、魚沼市からお礼の手紙とはがきが届いた。そこには、お礼の言葉と震災の様子、復興の様子がかかれていて、私は義援金を送ってよかったと思った。

私は、牛に出会ったことで命の大切さ、働くことの大変さ、そしてお金の大切さを学んだ。この学んだことをこれからの生活に活かしたいと思う。

むだ使いをしないで物を大切に使う。こんな小さなことを毎日続ける、それが今の私にできる活きたお金の使い方だと私は考える。

